

わくわくマジック福岡 フィリピン公演

第四回【わくわくマジック福岡】の国際交流マジックショーが2013年2月1日から2月7日の一週間で開催されました。毎年首都圏でのボランティア公演活動でしたが、今回は地方公演を企画し、マニラ⇒ブラカン⇒スービック⇒バギオ⇒ブラカン⇒マニラと車で移動されました。移動距離は何と約900kmに及ぶ巡業でしたが、平均年齢76歳のボランティア・マジシャンの方々は非常にお元気で、各地では大変な歓迎と出演者の芸に拍手喝采に大満足で帰国の途に就かれました。以下は2013年2月4日付「日刊まにら新聞」からの写真と記事の抜粋です。



何もない新聞紙に突然文字が現れ驚く子供たち=2日午前11時半ごろ、ルソン地方ブラカン州パオンボン町サントロサリオの教会で写す

日本の老人福祉施設などで慰問活動をしている手品グループ「わくわくマジック福岡」のメンバー5人が2日、ルソン地方ブラカン州パオンボン町サントロサリオで公演し、集まった地元の子供ら100人余りが手品を楽しんだ。グループの代表、寺田達雄さん=福岡県=は「今までいろいろな人に助けられたので、恩返ししたい」と、定年後のボランティア活動として、66歳で手品を学び

始めた。今では、約150人の生徒を抱える。ブラカン州に住む同郷の日本人の紹介で、2003年からフィリピンでも公演するようになった。この日の公演では、練習わずか1回で本番に挑戦した濱静子さん(80)も三つの手品を披露。「のぼせてしまったが、楽しくできました」と初公演を楽しんだ。手品の後には、子供らと一緒に紅白のひもを使った遊びや、新聞紙で簡単にできるクリスマスツリーづくりをして、同行の母親たちも大いに盛り上がった。子供たちには、塗り絵セットと昼食が振る舞われた。最前列で楽しんでいたレスター・メンドーサちゃん(8)は「光が指から指に移る手品は初めてみた。面白かった」と笑顔を見せた。寺田さんによると、日本の子供たち相手に同じ手品をやるのは10分が限界という。「日本の子供はすぐに飽きてしまう。フィリピンの子供たちはみんな、目の色を変えて真剣に見てくれる。もともと明るいし、手品のやりがいがある」と語った。寺田さんらは5日にバギオ市でも公演するほか、来年以降も比公演を続ける予定。

参照)【わくわくマジック福岡】のバギオ公演の様子は、【バギオの北ルソン日本会 JANL】のブログで詳細が確認できます。同記事掲載のブログ URL は以下の通りです；

<http://janl.exblog.jp/17271146/>